

# こころの言の葉

～第11集

ゆれる心つつむ心～

平成25年度「こころの言の葉」コンクール作品集

鹿児島市教育委員会 編

## はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 石踊 政昭

本年度の「こころの言の葉」作品集ができあがりました。皆様のお手元にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているものです。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。今年度は十一回目を迎えました。

本事業には、面と向かつては、気恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の交流を図り、お互いの存在について考えを深め合うという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられ、その数は一万五千六百二十八点。特に、親の部の応募が昨年に引き続き千点を超え、「こころの言の葉」への関心の高さと、本事業の趣旨である、親と子の心の交流が図られていることをうかがうことができました。

この作品集には、中学生の子どもから親へ、親から中学生の子どもへあてた数十編のメッセージが掲載されています。本年度は、昨年多かった家族をつなぐ心のつながりや感謝の思いといった言の葉に加え、辛い現実に向き合っている親と子の心模様がいくつも綴られています。子どもから大人へさしかかる揺れ動く時期の中学生の気持ちや、そんな子どもたち戸惑いながらも正面から向き合い、包みこもうとする親の様子には、読む者の心が揺さぶられます。ご家族皆さままでこの作品集に触れ、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださったすべての皆さまに心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成二十五年十二月

# 目次

## 「想いをゆらす」言の葉 — 子から親へ —

「お茶のついでに」	4
パンチ！	5
母さんへ言いたいこと	6
ちがう	7
「甘すぎる卵焼き」	8
父さんのお弁当	9
本当の気持ち	10
お父さんの子で	11
それが私の家族	12
白いシャツの中にある想い	13

## 「願いをこめる」言の葉 — 子から親へ —

これからもよろしく	26
父さん	26
これからも	27
次は、私の番	27
「絶対に忘れません。」	28
私の誇り	28
ちゃんと分かってもらいたい	29
お願い	29
最後まで聞いてよ	30
なやみごと	30
心の中で	31
だから私は伝えます	31
「おかえり」の一言	32
世界でただ一人のお母さんへ	32

## 「想いをつつむ」言の葉 — 親から子へ —

「声」	15
伝わっている。	16
ハガキ	17
「父と娘」	18
心のひまわり	19
手をつなぐ	20
弁当箱	21
「ちゃんと届けます。」	22
朝の見送り	23
「頑張れ〜！」	24

## 「願いを伝える」言の葉 — 親から子へ —

母からの手紙です	34
やっぱり	34
娘よ	35
手紙ありがとう	35
父娘	36
「ありがとう」	36
「いつか笑い話に」	37
その日	37
ごめんね ありがとう	38
一緒に乗り切ろうね	38
お願いね	39
「幸せタンク」	39

平成二十五年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	40
平成二十五年度「こころの言の葉」コンクール表彰式	41
審査員講評	42
編集後記	43

# 「想いをゆらす」言の葉

—子から親へ—



## 「お茶のついでに」

お父さんは、勉強している私のもとに、お茶をもって来る。そして、「数学わからないところない？」とお決まりの言葉をかけてくる。私はいつも、「わからないときには自分から言うから。」と、少し怒って言う。すると、何も言わずに、私の部屋から静かに出て行く。その後、私は「少し言い方がきつかったかな」と、よく考える。喉が渇いても、意地をはって、お茶を決して飲まなかった。

次の日、机の上に置きっぱなしだったお茶は、緑色から茶色になっていた。それを見たら、私は、お父さんの心もこんな風になったのかな、と気づかされた。その日、私は、お茶をもってきたお父さんの言葉に、普通の口調で返してみた。お茶も全部飲んだ。もしたら、勉強もいつもより進む気がした。



# パンチ！

私は小学校の頃から気が弱い、だから一、二年生の頃は気が強いクラスメートに陰口を言われることも時々あった。

けれど、私は意地っ張り。全く気にしないようなふりをして、家に帰ると母に泣いて相談した。

そんな時、母は大きく息を吸うと

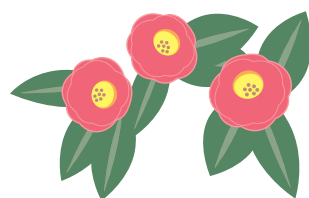
「そんなことを言うやつは……。パンチ！」

そう言って拳を見えない相手に向かって振り上げる。「ふざけてるんじゃない。」といらいらする時もある。

だが、少し落ち着いてから考えてみると、そう言ってくれるときの母の顔が真面目なのに気付き、笑ってしまう。

何だか、「元気にいけ！」と、背中を力強く押された気分だ。

最近、「キック！」を見た。その真剣な姿とおかしな動きに、私はまた笑顔になる。



# 母さんへ言いたいこと

母さん、ぼくは性格がよくありません。

母さん、ぼくは頭がよくありません。

母さん、ぼくは運動はあまりできません。

母さん、ぼくは期待に応えられません。

母さん、ぼくは部活もだめだめです。

母さん、一言よろしいですか。

母さん、こんなぼくをいつもささえてくれてありがとうございます。



# ちがう

今日もまたおこられて、そしていつものように戸を強く閉めた。母は私がわざと戸を強く閉めたことにおこり、また大声でどなる。私は耳をふさぎ、母が問いかけても返事をしない。すると母はまたおこりだし、こっちにくる。いやなよかんがして、戸をおさええていた。

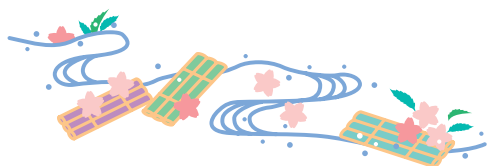
本当はちがう。母さんのせいで、おこっているんじゃない。自分のおこしたあやまちにおこっているだけなんだ。





## 「甘すぎる卵焼き」

母の卵焼きは甘い。色はうすい黄色だ。前から甘い卵焼きを食べてきたが残したことはないと思う。母の甘い卵焼きは、思い出。その味にいろいろな思い出がたまっている。幼いころ、いっしょに食べていた昼ごはん。それにはかならずといっていいほど卵焼きがあった。卵焼きを食べると思い出をたくさん思い出す。母の卵焼きは笑顔を産み出す。幸せの卵焼き。大げさかもしれないがぼくにとってはそれぐらいだ。甘い甘い卵焼き。砂糖は気持ちちよっと多め。ぼくをつくる卵焼きも砂糖は多め。そのちよっと多めの分は、母に対する感謝の気持ち。ありがとう。



# 父さんのお弁当

今日はお母さんが実家にお泊りしていて家にいなかった。

だから部活の弁当はお父さんが作ってくれた。

昼食のとき、弁当箱を開けてみた。中身は冷凍食品と卵焼きだけ。

でも卵焼きだけお父さんの手で作ったから、茶色くこげていた。食べてみると、

パサパサしていて正直おいしくなかった。でもなぜだろう。

急に胸が熱くなった。おいしくない卵焼きをおいしいと思えた。

冷凍食品もまるでお父さんの手で作ったかのように愛情がこもっていた。

日曜日の朝、仕事でつかれているのに私のために早起きをして弁当を作ってくれた。

でも、私は素直じゃないから「ありがとう。」って言えなかった。言いたいけど言えない。

だけど、今度絶対言おうと思う。「ありがとう。」って。



## 本当の気持ち

お父さん、お母さん、本当にまだ一緒にいてほしかったです。

仕事をしなくなって、家に住むこともできなくなって、夜に一階から口論しているのを何度も聞きました。試合の帰りに、母からこれからどうする、と聞かれ、父と二人の時に、ごめんな、と言われました。僕はその状況に戸惑って、別に大丈夫だからと意地をはっていました。

でも本当は、もう家族全員で生活できなくなることに、さびしさを感じていました。本当は、大人になるまで、一緒にいたいということを知ってほしかった。そのことに気づいてくれたら嬉しいな。

今僕は、悲しい気持ちでいっぱいです。



# お父さんの子で

なんで？ どうして？ お父さんに怒られるたびに思う。私、本当の子じゃないよ？ お母さんの連れ子なのに。どうしてそんなに怒るの？ どうしてそんなに心配するの？ 血だっつながってないのに。弟だって、半分しかつながってないよ？ なんでそんなに「似てる」って言うの？ お父さん、本当は自分の血が流れてる弟の方がスキでしょ？

そんな事を思って、勝手に家を飛び出した夜。探しに来てくれたよね。お母さんとお父さんと弟。顔を見たら泣いちゃって、お母さんと二人で泣いてたら、お父さん、笑い泣きの表情で、

「無事で良かった。」

って。大きなその手で頭をなでてくれた時、私は思ったんだ。

「お父さんの子でいいんだ。」

って。お父さん、ありがとう。大スキだよ。



## それが私の家族

「家族って本当にケンカするの。」

母に聞くと、

「それぞれの家庭によって考え方や接し方が違うのよ。」

と言われた。私はテレビを見ている。テレビの中では家族同士が言い争ったり、激しくケンカしていたりして本音をぶつけ合っている様子を感じとれた。私の家族はケンカをしない。母がひたすら我慢しているのだ。本当はこんな家族じゃないかも、そう思った。そんななか、父が病気になり家族や親せきはショックをうけた。母だけが泣かずに笑顔で看病し続けた。夜中のリビングでは、母は一人で千羽鶴を折っていた。私は思った。本音をぶつけ合う家族ではないかもしれないけど、思いやりにあふれ、お互いの幸せを願っている、それが私の家族だ。この家族でよかったよ。



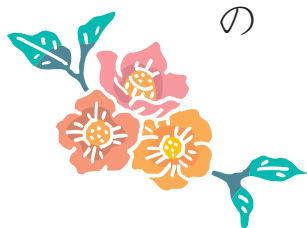
# 白いシャツの中にある想い

平日の朝いつものように真っ白いシャツ。どんなにきたなくなったシャツもまほうのようにほぼ元どおり。

シワ一つない、アイロンの温かさがまだ残っている。いそがしい時でもそれはかかさな母である。楽にできるように、できるだけよごさない。それがぼくにできること。

なぜか思う、いやな時も、うれしい時も、なやんでいる時も、それは、真っ白いシャツの中に温かさがある。アイロンの温かさでもない。さわらなくても、ふれなくてもわかる。見れば、たちまち心に広がるこの気持ち、それはお母さんの心の温かさだったんだね。

どうしようもないこの感謝の気持ちを伝えにくいから、次はぼくがお母さんにぼくの心の温かさを感じ取ってもらおう番です。



# 「想いをつつむ」言の葉

— 親から子へ —



# 「声」

私の声は、いつも大きい。

あなたを朝、起こす時、あなたを叱る時、

あなたに頼る時、あなたを励ます時、

いつもいつも大きい声を出す。

中学生になったあなたは時々、私のことを

恥ずかしがる。年頃だし、これからは少し

考えないといけなかなと反省することもあった。

でも、部活の試合で、いつものように大きい声を

出して応援すると、あなたは私の方を見て、小さくうなずいた。

私の声が力になったと言ってくれた。

私の思いが、あなたに伝わったことが嬉しかった。

これからも、かわらず、ずっと大きい声であなたを応援していききたい。

私の思いがあなたに伝わりますように。





# 伝わっている。

うちの息子、私の話を聞いているのかどうか、よくわからない今日この頃。

ある日、私が熱をだしてダウン。

フーフーフーいつている私の枕元に、氷まくらと、ストロー付きのスポーツドリンク、りんごが置いてあった。

思わず笑みがこぼれる。

あなたが熱をだした時、私がするのと同じことをあなたはしてくれた。

言わなくても、話さなくても、気持ちはちゃんと伝わっていた。

たまには、こんな時間もいいなあ……



# ハガキ

毎日のハガキありがとねえ。福岡に単身赴任のお父さんに、ハガキを書き始めて、二年半。兄ちゃんと分けた裏半分のスペースいっぱい、その日の出来事や思ったこと、興味を持ったことを書いたり、四コママンガなども入れたり。今でも続けているおもしろい絵は、仕事で疲れたお父さんを癒してくれるそうです。

あなたも兄ちゃんも、この二年半で、ずいぶん難しい年頃になり、お母さんが書く、表の下半分には、愚痴を書く日が増えたかな。あなたたちもぐっとシンプルになる日も多くなったかな。それでも、思春期まったただ中のあなたたちが、一人でがんばってくれているお父さんのことを思い、ハガキを毎日書き続けてくれる、そのことが、お父さんもお母さんも、とてもうれしいのです。お父さんの元に届いた、もう千枚近くにもなるハガキは、日付順にきれいに重ねられ、大切に保管してくれているよ。

もう少し続きそうなお父さんの単身赴任生活を、これからもハガキで、少しでも支えてあげようね。どうぞよろしくね。そして、ありがとう。

# 「父と娘」

お父さんはあなたのことが大好きだよね。

授業参観から帰ってくると、いつも、

「やっぱり、うちの〇〇が一番かわいかったよ。」

って、親バカ丸出しで満足顔。

中学生になって、少しだけ父離れたあなたには、

お父さんの大きな大きな愛情が、

時に暑苦しくなるみたい。

でも、お父さんが、あなたを大好きなのがわかってるから、

「しょうがないなよ」

って言いながらも、今日も枕を並べて一緒に寝てるんだね。

そんな二人を見ながら眠るのが、お母さんはとても嬉しいよ。



# 心のひまわり

1年前、あなたが部活の部長を引き受けることになったとき

「なんで引き受けたの！」

と思わず言ってしまったよね。お母さんは（きっと大変な想いをする…苦勞する…）そう思ったからです。

それから家でも部活の話をよく話しましたね。

あなたの毎日の大変さや、みんなのことを想う気持ちがよく伝わってきました。いつも部活のことで頭の中はいっぱいでしたね。

（そんなことを考えていたんだ…）

あなたの、大人っぽい考え方にびっくりしたこともありました。机の上ではできないお勉強をたくさんしてきましたね。

子どもに大変な想いはさせたくないと思ったけれど、それが、ほんとうは必要なことでした。暑い夏に咲き終わったベランダのひまわりの花が今、種を作っています。その葉っぱの間にちいちゃい「おまけのひまわり」が咲きました。なんだかうれしくて得した気分…。もうすぐ大好きだった部活もおわりますね。

あなたの心にも今、

このおまけのひまわりの花が、

いっぱい咲いているような気がしています。



# 手をつなぐ

寝ているあなたと

ひさしぶりに手をつないでみた

私の手を包み込む母親のような優しい手

びっくりした

そして安心した

あと何回こうやって手をつなぐことができるのだろうか

いつの時でもあなたたちを安心感で包んであげられる

そんな母でありたいと

強く思った



# 弁当箱

あれは、小五の秋、遠足から帰ってきた貴女は、ボロボロ泣きながら「お弁当おいしかった」

と言った。遠足にたった一人で弁当を食べたそうだ。原因はイジメ……。

担任に電話しようとした私に、

「大丈夫、自分でどうにかしてみる」

と決意した顔で言った。自分の足で進もうとするまっすぐな瞳に、

弁当箱を洗いながら私はボロボロと泣いた。

あれから四年。弁当箱を洗いながら「今日はどうだったかな？」と貴女の一日を思う。泣きそうな顔、嬉しそうな顔、貴女は色々な顔でそれを渡してくる。私は迷いながらも歩いていく貴女を、弁当箱を洗いながら今日も愛しく思う。

いつの日か、貴女もそうやって我が子を想うのであろうか……。



# 「ちゃんと届けます。」

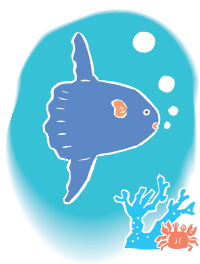
思春期の頃、私は大切な話になると「思っている事を言ってごらん。」そう言われても何も言えず、涙目で黙り込んでしまう子でした。心の中にたくさんのお思いがありすぎて、中々出てこない言葉。想いが大きすぎて、言葉にならず涙が出てくる。そんな自分が嫌でした。その性格を見事にあなたが引き継ぎました。「……。」沈黙が続くと、自分と重ね合わせて、ついついきつい口調になってしまいます。本当は、あなたの気持ちが手に取るように解るのに……。言葉は時に相手を傷つけ、時に優しく包み込む。自分が言った言葉で相手が傷つくかもしれない。そして怒らせるかもしれない。でも、その心の声を、やっと言葉になった気持ちを受け止めてあげたいいつも思っているからね。実は、未だに苦手だけど、あなたを大切に想うから、私の気持ちは、ちゃんと届けます。



# 朝の見送り

「行ってきます」出かける中一の娘を毎朝必ず玄関まで見送る父親。それがいつの頃からの我が家の習慣。おそらく、4年近く前からではないか。その頃、深夜・休日も仕事という時期があり、朝一番早く出かける娘とは会えないすれ違いの日々が続いていた。そんなある日、夜帰宅すると、食卓に娘からの手紙が。その日あったうれしかったことや、友達や学校での出来事などが小学三年生なりの表現で一生懸命書き連ねてあった。

そして最後に「最近会えなくてさびしいな。でもお仕事だから仕方ないよね」の文字。その次の日、まだ眠い体を叩き起こし、玄関で娘を見送った。それから、少なくともこの朝の見送りだけは続いている。見送った後に二度寝することもあるけれど。最近また娘から手紙をもらった。中学生のしっかりとした文章の最後に一言。「毎朝、見送ってくれてありがとう」





# 「頑張れ〜！」

あなたは、小さい頃、私が寝込んだ時、耳元で「ピッピッピー！」と笛を吹き、おもちゃの太鼓をたたいて、

「お母さん、頑張れ〜！」

と、わんわん泣きながら応援してくれましたね。私は、「そうきたかあ。安静が必要な時に、頭に響く応援、ありがとう。」

でも、あなたのあの必死な姿を見て、気分の悪さもどこへやら：笑ってしまいました。

あなたが中学生になって、お母さんが一番多く言った

「頑張れ〜！」

あなたの答えは、いつも「これでも頑張ってるんだよ！」の一言。

頑張っている自分って素敵じゃない？

「頑張っているあなたが好きだよ〜って聞こえてくれたらいいなあ。」

だって、頑張っている人にしか「頑張れ〜！」の本当の意味は伝わらないもの……

私だけの小さな応援団長だったあなたへ

母より

# 「願いをこめる」言の葉

—子から親へ—



## これからもよろしく

母は毎日、朝に帰ってきてそのままお風呂に入って寝てまた夜に起き仕事へ向かう。母の仕事はタクシードライバー。そんな母から学んだこと、それは人と人とのコミュニケーションだ。自分はあまり口数が少なく、友達との関係もあまり上手くできていない。だからもっと社会性を磨きたいと思っていたその時。母は僕にある言葉を教えてくれた。それは「恥ずかしいと思う心が恥ずかしい」という言葉だった。この言葉を胸に母は日々タクシードライバーとして頑張っているのだ。母は、この言葉のおかげでお客さんが増えたと言っていた。だから自分もこの言葉を胸に日々を楽しみたい。



## 父さん

いつも同じ事しか言わない父さん。はっきり言ってるさ。一生懸命働いて、土日にはどこか行かないか？と誘ってくれて、色々な事を教えてくれる父さんは、とてもいい父だと思ってる。同じ事しか言わないのも、少しでも僕と話そうとしてくれるからってのも分かってる。

でも、素直になれない僕は無視したり、キツく反論してしまう。それでも父さんはいつも僕に話しかけてくれて、ニコニコしている。優しい父さんに、僕は甘えているんだと思う。

こういう事を思っても、やっぱり僕は、いつもと変わらない態度で、父さんと接してしまうだろう。あと少し、僕の心が大人になるまで、温かく見守っていて欲しいです。

## これからも

私は、幸せだと思う。優しくも厳しい両親がいて、無愛想だけど勉強を教えてください。兄がいる。一つ人と違うところがあれば私は不登校だ。そんな私でも充実した毎日を送っている。最初こそ両親は理解しなかった。「なんで学校に行かないの」と毎日のように怒られた。私は心の中で何度もごめんなさいと謝った。でも、そんな両親も次第に私のことを理解していった。母は無理に学校に行けとは言わなくなったし、父は不登校関連の書物を読むようになった。それが少しうれしかった。そんな両親に後押しされて適応教室に通うことができるようになった。お母さん、お父さん、今まで迷惑をかけてごめんなさい。そしてこれからも迷惑をかけ続けるかもしれない私を支えてくれるとうれしい。これからもよろしくお願いします。

## 次は、私の番

ねえ、すごいと思わない？  
「杏ちゃん、頑張ったね。すごいね。」  
私のテスト結果を見て、父さんがニッコリ笑う。テストの結果より、私は、父さんが私の欲しい言葉を言ってくれる方がすごいと思うんだ。父さんは、私の結果が悪くても責めたりはしないけど、やっぱり喜んでほしい。「見ためは君似。性格は僕似。」この前、そう母さんとリビングで話してた父さんの顔は、本当に幸せそうで。照れ臭くてドアの前でUターンして自分の部屋にこっそり戻ったっけ。でもさ、そうだったらこれほど嬉しいことはないよね。次は、私が父さんをもっと幸せにする番だ。与えられてはっかじゃ、面白くない。  
さあ、その角ばった背中に向かって…  
「父さん、大好き!!」  
ほら、私もすごいでしょう？

## 「絶対に忘れません。」

お母さんが亡くなって六年が経ちました。まだ私のことを覚えているでしょうか。

この六年間、色々ありました。友達ができたり、兄ちゃんやばあちゃんとけんかをして家出をしたり、学校で嫌なことがあって悩んだり…。本当に山あり谷ありの人生でした。

お母さんのことを思い出して泣いたこともあり、病院の先生に薬をもらいました。

でも、あしなが育英会の「小中学生遺児のつどい」に参加して、少し心がスッキリしました。親を亡くした子どもたちと話して、とても共感することがあったし、一人ぼっちじゃないんだと思えました。

お母さんが、保育園の卒園文集に書いてくれた、「あなたの笑顔がナンバー1です。」という言葉、絶対に忘れません。

## 私の誇り

私の父は単身赴任で東京で仕事をしています。夜中に出勤する仕事なのでとてもきつい仕事だと思っています。

久々に家に帰ってきた父はとてもやさしくて驚きました。とてもおもしろい父は前と変わらず、おもしろい話をしてくれました。うれしかったです。将来のことを話したりしましたが、私の意見に反対することばかり言ってきたので嫌な態度をとりました。それでも「宿題手伝ってやるから許して。」と言って笑わせてくれました。仕事のことについて私が父に聞いたとき、父は弱音をはきませんが、正直仕事内容はとてもきつそうでした。

父を空港に送るとき、「自分のためにやっている仕事ならとっくになげだしてる。家族のためだから頑張っているだけだ。」と言ったとき、父を誇りに想えて、私は泣きそうになりました。

## ちゃんと分かってもらいたい

私には2人の兄がいます。兄達は私と違って、努力家で、真面目です。こんなところが憧れでもあり、気に入らないところでもあります。

なぜかというと、すぐに比べられるからです。母はいつも私を、兄と比べとても怒ります。

けど私だって頑張っていないわけではありません。結果はあまり残せませんが、私も努力しています。本当は大きな声で叫びたい。ちゃんと分かってもらいたい。私が言うのと、言いわけに聞こえるかもしれないませんが、本当に努力しているんです。

もっと私が頑張っているところを見て欲しい。そして思いつきり、褒めて欲しい。私が努力していることに、気づいて。

## お願い

「勉強、終わったの？」

「テスト、頑張ったね。」

「早く寝なさい！」

なんて言葉を私に言わないお母さん。

私に期待してる？

言われたら言われたでムカついたりするんだらうけど、言われない私はとても不安です。

だからお母さん、一度でいいので私に言ってください。「勉強しなさい！」って…。



## 最後まで聞いてよ

せっかく私は相談しようと思っっているのに、  
「くだらないこと言っただけで勉強した  
ら？」

なんて言わないで、最後まで聞いてよ。な  
やみ事を話してスッキリさせたいのに心の  
声をその一言でかき消さないで。私の心の  
声を最後まで聞いて。



## なやみごと

中学生になってからぼくはとてなやんで  
いる。塾のこと、自分の性格、友達関係…

特に塾のことは本当になやんでいる。み  
んなが夏祭りに行くときだってぼくは塾。

なんで一年の時から塾に行かないといけな  
いの。なんで最近成績にうるさくなったの？  
特に成績にうるさいことがはっきり言っ  
てうざい。成績なんてどうでもいい。

のびのび育てといった母はどこへいった  
のか。自分の気持ちを分かってほしい。

## 心の中で

毎朝、「早く起きなさい。」から始まって、一日に何回しかられるだろう。「聞いているの？あんたみたい、毎日注意される子もいないかもよ。」と言う母に、「いちいちうるさい。私は、反抗期だが。」と口答えした。「ああ、そうね。あんたが反抗期なら、私は更年期だが。」と母が応戦してきた時は、思わず笑ってしまった。この頃は、面倒くさがり、うるさがり、だんまり、そんな繰り返し。

生まれる前から、障害があることを聞かされていた母は、どんな思いで私を産み、育ててきたのだろう。そして、今は、どう思っているのだろう。小さい頃のように素直になれたら、もっと楽なのに。

「ごめんなさい。」母の背中に、心の中でそっとつぶやく。

## だから私は伝えます。

赴任先で父が倒れた。最後かも知れないと告げられた私達は絶望の色に染まりました。と同時に、後悔の波も押し寄せてきました。(ありがとう) たったの五文字をなぜ今まで言えなかったの？

私はいつも恥ずかしくて、「ありがとう」と本当は思っているも口に出さないことが多くありました。でも、大切な人を失いかけてやっと気付いた。伝えないといけない想いは、想ったときに伝えなければならぬ。

だから私は伝えます。

お父さん、今まで素直になれなくてごめんなさい。最後かも知れないとお医者さんに言われ、私は初めて自分にとっての父の存在を考えました。私が生きていくうえで必要な人。それがお父さん。今のお父さんにはできないことが沢山ある。家族みんなで支えるからいつまでも笑っててね。



## 「おかえり」の一言

私は、学校から帰ってきてても親はいない。「ただいま」と言っても「おかえり」とは返ってこない。だから、最近は「ただいま」すら言わなくなった。

私の親は共働きで夜遅く家に帰ってくる。私は学校にいる時も「今日は家にいるのかなあ」と考え、帰宅する時もわくわくしながら帰る。でも、家の前の駐車場に車がないうと「ああいないんだなあ」といつも思う。どうして私は親がいないと分かっているのにわくわくしながら帰るのか。それは、私の心の中で秘かに期待しているからだと思う。

でも、親の仕事が休みの時は私はすっごくうれしい。「ただいま」と言うと「おかえり」と返ってくるからだ。「おかえり」の一言は、私にとって、とても心に響くかけがえのない言葉なのだ。

## 世界でただ一人のお母さんへ

いつも明るいお母さん。私のことを一番に考えてくれていてお母さん。お父さんと離れて暮らすようになってから、私を一人で支えてくれたね。私より何倍もつらい思いをしているし、たくさん悲しませてるよね。知ってるよ。いつも一人で全部かかえこんでいること。私もお母さんに似たのかな。お母さんを苦しめたくなって、悲しませたくなくて、悩み事はあまり相談しない。でも、さすが私のお母さん。何でも見破るよね。私が無理に笑っているときも「どうしたの。」って聞いてくる。正直、嫌なんだ。お母さんに何もできてあげられない私が。いつも「ありがとう」という言葉を素直に伝えられない私が。でもそんな私に愛をたくさんくれるお母さんは、世界に一人しかいないよ。「いつもありがとう。」

# 「願いを伝える」言の葉

— 親から子へ —



## 母からの手紙です

財布の中の二つにたたんだ小さな手紙。字を覚えたばかりのあなたからの手紙です。「いつもいっしょにいてくれてありがとう。ぼくは、じゃまだと思います。こんどはやくにたつこになります。」

涙が出ました。こんな小さな子に、こんな思いをさせていたことに。恐くて聞けなけれど、時々考えます。今でも、そんな思いをさせているのではと。たまにこの手紙を読んで反省します。母から手紙です。

「いつもいっしょにいてくれてありがとう。邪魔じゃないし、役にも立ってる。むしろ自慢の息子です。反対にもっと迷惑かけなさい。以上」

## やっぱり

肩をもんでくれるその温かい手で、お母さんを払いのけたよね。

「やっときたか反抗期!!」と、思ったけど、チヨツと、へこんじゃった。

「いいよ。どんどん反抗して、ぶつかってきなさい」ってカッコよく言いたいけど、やっぱり、そつと、肩をもんでくれる温かい手のあなたが大好き



## 娘よ

娘よ 明日 テストでしょう。

父とテレビをみて大笑い。

父とたたみでごろ寝。

娘よ、もう朝でしょう。



## 手紙ありがとう

あなたが、照れくさいなと思いながら書いた姿が目に見えびました。

自分で「反抗期だから素直にありがとうって言えないけど、心の中でありがとうって思ってるんだよ。」

と書いてあったけど、それでもいいのよ。お母さんもそんな時期があったから分かる。

お母さんの存在があなたの支えだと書いてましたが、それはお互い様です。

あなたがお母さんの娘として生まれてきてくれたから、笑って前に進んでこれたんです。

これからも、少しでも多く笑って過ごせるように共に成長しながら歩んで行きましょう。

なんと言っても、私はあなたの味方です。

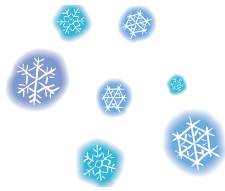
## 父娘

娘を笑わせようとする父

笑わないようにする娘

いつも笑ってしまう娘を見て

喜び、勝ち誇った顔をする父



## 「ありがとう」

「明日の朝ごはん、何？」

夜、寝る前に君が言うセリフ。君は、本当に何でもおいしそうに食べる。母親としては嬉しい光景。

こんな君が病気以外で食事をとらなかったのは、たった一度だけ。一年半前、父親が救急車で運ばれ、体が全く動かない父親と対面した夜だ。

私は、仕事関係先に夜遅くまで電話対応に追われていた。その私の横で、君は涙も流さず黙々と家事をこなし、ずっと私の横についてくれていた。やっと一段落して、「ゴメン。ご飯にしようか？」と声をかけると「大丈夫。お腹空いてないから。」と、ひきつった君の笑顔。あれから、父親は驚異的な回復で、今では元気に仕事復帰できた。次男で甘えん坊の君がああ夜から、一気に成長した。

あの時、あの夜は、本当にありがとう。とても心強かったよ。

## 「いつか笑い話に」

今、あなたは辛いよね。中学生になったたん、思春期にかかる病気になるって、夜は眠れない。朝は起きるのがつらい。

いつまで続くのか、この長いトンネルは：学校に行きたくても行けない辛さ、部活に行きたくても行けない辛さ、友達と遊びたくても遊べない辛さ、

「どうして僕だけ普通の体じゃないの？どうして、ね、母さん!!」

と泣きながら、あなたが訴えた時は、胸が張りさけそうでした。

「ごめんね、ごめんね。お母さん、ただ見守るだけしか出来ない。一緒に泣くことしか出来ない。でもね、この病気は期間限定。必ず治る思春期だけの病気なんだって…」

今はつらいけど、いつか、きっと『笑い話』に変えようね。」

母より

## その日

その日、私は泣きながら、球場をあとにした。息子の中学生になってからの初めての試合…

勝ったからでもなく、負けたからでもなく、全員出場ということを聞き、張り切って応援に出かけいつ出番が来るのかと楽しみにしていた。試合は終わった…。

とうとう最後まで出場することはなかった。

息子が帰ってきた…。

私の目は真っ赤である。何かを感じとったのだろう。

その日を境に息子が変わった。それまでもやっていた自主練習。

ランニング、素振り、スクワット…。

今まで以上に自分を追い込んでいるように見える。私は心の中で「頑張れ!!」と叫んだ。

先輩が引退し、息子にとっていよいよ最後の一年がやってきた。

「ファーストで打順は7番!!」監督の声が響いた。

今度は、嬉し涙があふれてきた。

## ごめんね ありがとう

「あなたがおりこうでいてくれるから、お母さんは安心して家をあけられますよ」弟の入院に付添い、病院に泊まる度にあなたに宛てたこの短いメモのような手紙を何枚も、あなたは大事に机の中にしまっていました。小さい時から入院を繰り返す弟に付添う私に、心の中では、「私だってお母さんと一緒にいたいのに」とつぶやいていたのかもしれませんが。反抗期まっ只中の今、何かと反抗する言葉や態度をみせるあなたを見る時、これまでのことを思い、胸がつまります。弟とたった二つしか年も離れていないあなたにどれだけ我慢や寂しい思いをさせてきたのだろうと…。今では、元氣すぎるくらい元氣になった弟に、ほっとしているのは、私よりあなたの方なのかもしれません。

「なっちゃん ごめんね。ありがとう」あなたにずっと伝えたかったことばです。

## 一緒に乗り切ろうね

朝なかなか起きられなくなり、学校の準備に時間がかかるようになった。何よりも常に明るい表情だったあなたから笑顔が消えた。これはおかしい。すぐ受診をして治療が始まり、半年が過ぎてだいぶ元の表情が戻ってきました。

あの時、仕事の忙しさにかまけないで、もっと色々な話をして悩みを聞いてあげていたらこんなに苦しい思いをさせずに済んだのに。母親失格だ。お母さんも自責の念に駆られた時もありました。

だけど今更後悔しても仕方ない。これも親子の絆をもっと深めていきなさいという天からのメッセージ。私たち親子なら乗り越えていけるからこの試練を与えられたのだと思うことにしました。

さあ、とにかく一緒にこの病さんと仲良く付き合っつて、いつの間にか病さんが消えてくれていられるようにしようね。

## お願いね

最近のあなたはどんなに注意をしても聞く耳持たない感じだけど、お父さんやお母さんが小さな声で話しているとそっと耳を向けてるよね。少しは届いているのかな。親の心子知らずと言うけれど、いつもマイペース過ぎて逆に心配です。時には、危機感を持ったらいのにと思う事も多々あります。そんな心配をするお父さんにもう少し優しく接してあげてね。最近はこちらも冷たく接する年頃だから仕方ないけど、今でもあなたの事を一番に考え、いつまでもあなたの事を、ちゃん付けて呼んでいるお父さんを優しく大事にしてあげてね。お母さんからのお願いですよ。



## 「幸せタンク」

「思春期の子どもに反抗され、つらい時期があるかもしれない。しかし、それを帳消しにするだけの幸せを、親は子どもが幼いときにもらっている。」

細かい部分は覚えていないが、以前読んだ本の中にあつたこのことばを、今も忘れずにいる。

すでに私の目線の上にいる息子。おそろく思春期に差しかかっているであろう息子に、私は今でも幸せをもらっている。これから先、いろいろなことがあるだろう。しかし、これまでに蓄えられた幸せで、どんなことでも乗り越えられる気がする。それほど私の「幸せタンク」は満タンである。ありがとう。あなたのしぐさ、あなたのことば、何よりあなたの存在に。これまでも、そして、これからも。



## 平成 25 年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧

応募総数 15,628 点 (中学生 14,531 点 親 1,097 点)

賞	中学生の部	親の部
大賞	石川 絵梨	川上 歩美
準大賞	米森 健人	廣瀬 衛子
準大賞	田口 聡香	河野 理奈
優秀賞	間淵 里菜	関上 千佳子
優秀賞	柳井田 昂	向吉 香代子
優秀賞	松山 和喜	平松 由美
優秀賞	白尾 匠	脇田 博子
優秀賞	井上 玲	五反田 里美
優秀賞	有村 真衣	石宮 聡
優秀賞	徳留 千紘	山下 眞理子
入選	岡留 龍馬	向田 寿子
入選	凶師 翔太	松元 協美
入選	元栄 ひな子	上ノ町 美代子
入選	飯島 杏香	上川 礼子
入選	宮田 恵美理	山下 亜矢
入選	赤島 奈央	高山 清徳
入選	脇田 みなみ	野村 祥子
入選	岩川 佳士乃	坂元 民子
入選	税所 透華	坂口 昭江
入選	神宮司 紀香	梅本 こゆり
入選	萩原 瑞紀	吉野中保護者
入選	安村 菜月	
入選	牧野 竜也	
入選	金尾 有莉	
団体特別賞 鹿児島大学教育学部附属中学校		

※ 入賞者で、了承が得られた方のみ、氏名を掲載しています。

# 平成 25 年度「こころの言の葉」コンクール 表彰式

～平成 25 年 11 月 30 日（土） 市民文化ホール 第 2 ホール～

石踊教育長から  
表彰状の授与



受賞者インタビュー



鹿児島女子高等学校放送部  
生徒による作品朗読



審査委員長講評

## 審査員講評

### 審査委員長

千々岩 弘一 先生

十一回目を数える本コンクールに、今年も一五、五〇〇点を超える応募をいただいた。保護者の皆様のお声も昨年に引き続き一〇〇〇点を超えた。御応募いただいた方々には心から感謝申し上げます。同時に、学校・PTA・教育委員会をはじめとする関係各位の御尽力にも心から感謝申し上げます。

毎年のことながら、審査の過程で何度も目頭が熱くなった。御応募いただいた作品の一つ一つが「心の言の葉」であり、かけがえない輝きと力をもっているものだと改めて感じさせられた。特に、入賞された方々の「言の葉」は、鹿児島市民の共有財産として、後世にも伝えていきたいものばかりである。

それにしても、声に出して読むと、「言の葉」の命はさらに輝きをまし圧倒的な力で迫ってくる。中学校の教室で、家庭で、そしていろいろな場所ですべて出て味わっていただけのことを願っている。

私たちは、何気ない日常の中で「私たちが私たちがたらしめる他者の目」とともに生きている。しかし、身近であればあるほどその「他者の目」の存在に気づきにくい。中学生やその保護者だけでなく、鹿児島市民も本コンクールおよび作品集を通して、最も身近な「子どもの目」「親の目」、そしてそれらを包みこむ「お天道様の目」の価値を考える意義を共有したいものである。本コンクールの益々の発展を心から願っている。

鹿児島国際大学教授

大浦 慶子 先生

こころの言の葉に15、628名の作品が寄せられました。日ごろ、心の中で思っている面と向かって伝えられない言葉が詰まっていました。

それぞれの家庭の有様が変化してきている中で、精いっぱい心を寄せ合って生きている親子の姿が伝わってきます。すれ違ってしまった言動、どうしてこうなるのと思わず言ってしまうようなことが伝わってきます。今回は、悲しい・辛い別れに遭遇した心の叫びが、子どもの力ではどうすることもできない心の叫びが多く寄せられた気がします。

一方、どうやって親子の絆を確かめ合おうかと苦戦する微笑ましい親の姿もありました。遠く離れてお互いが生活していることへの思いやり、すれ違う時間を気遣う置き手紙、働く親への感謝も多くみられました。

思春期の中でもどかしく感じられる日々でも親の背中を見て子どもは成長しています。家庭の有様が変わっても、言葉にはできなくてもお互いの愛情が詰まっている家庭であってほしい、お互いを信じ励まし合える家庭であってほしいと願うことでした。

思春期を乗り越え、自立していく子どもにどう接していけばよいのか。「こころの言の葉」の作品集に多くの手がかりがあるように思います。多くの保護者、子どもたち、周りの大人たちに読んでほしいと思うことでした。

市教育委員会スクールカウンセラー

前田 昭人 先生

応募総数が15、000点超と、ますます裾野が広がってきた「こころの言の葉」。ただ盛況だからこそ、やや気になる点もあった。まず一つ。詩や散文詩のような短文体が少なからず散見されたことだ。別に応募規定の違反ではない。が、せっかくの「言の葉」だ、できれば起承転結に苦しんだあとが見える文章を読みたい気もした。

もう一つは家庭の多様化に伴い、母子や父子など一人親世帯の悩み、または家庭不和の葛藤を赤裸々につづった生徒たちの投稿が目立ってきたことだ。ただでさえ多感な時期に、両親の不仲が子どもたちの心に大きな影を落とすことは容易に想像できる。決して望ましい家族形態ではないが、そうかと言って特別視するものもどうかろう。家族のありようが変化する時代だからこそ「言の葉」の出番だ。できるだけ子どもたちの視線に近づいて、作品そのものを読み込もうと努めた。

「正の10を、10個集めると1000になる。負の10同士を掛けても1000になる。〈答えは同じでも、正を積み重ねた1000には陰翳（いんえい）がない〉とまれに正数を積み重ねたような、挫折を知らぬ人に接すると薄っぺらな印象を受けるのは、陰翳が欠けているからであろう。」（読売新聞・編集手帳 2010年6月11日から）

3年前、川崎市の中3男子が、いじめられていた友人を救えなかったとさいなんで自殺したことを書いている。たとえ一時負の数が目立つ子どもでも、それが役立つ未来はきつと来る。

南日本新聞社編集委員

## 坂口 洋文 先生

今年もまた、大きな感動を覚えながらの審査であった。なぜこのように心を揺さぶられるのであるのか。それは、真実の思いがにじみ出ているからだと思う。目の前に相手はいない。一人紙面に向かうという行為の中で、心静かに親が子を親を見つめるからこそ、面と向かつては言えない真実が綴られる。それが、読む者の心を打つのである。

孔子は「日に三省」したという。一日に三回も自分を振り返るといふことは、慌ただしい現代においては困難なことだろう。しかし、この静思の時間をもち、最も基本的な集団である家族にあつて、お互いの心情に深く思いをやること（思いやり）は、自我が発達し、悩み多き中学生時代には特に必要であろう。

その点において、優秀作品は、どれも親が子を子が親を見つめている。見つめ続ける中で大切なことを発見し、それが自分だけの「心の言の葉」となつて結晶している。

この静かに相手のことを思いやる大切な時間を、家庭や学校、社会の中でいかにつくっていくかは今後の課題であろう。

今回も一万五千点以上の作品の応募があった。これだけの鹿兒島の親子が、お互いを冷静に見つめ合う機会をもつたということは特筆すべきことである。

この作品集が多くの方に読まれ、理解や支え合いなどに生かされるよう願つてやまない。

元中学校校長

## 岩佐 睦美 先生

今回初めて、言の葉コンクールの審査をさせていただきました。殺伐とした時代、日々の状況だけは、めまぐるしく変わっています。子どもたちのおかれている環境も日々変化している中、コミュニケーション能力の不足などが言われています。

その様な中、親から子どもへ子どもから親へ様々なメッセージを読ませていただきました。日常の生活の中では、素直になれない気持ちをそれぞれがストレートに表現されていました。

親子であるゆえに遠慮しい我慢していたこと、感謝しているのに恥ずかしくて言えない言葉、特に「ありがとう」の一言が言えなかった思いをたくさん感じる事ができました。また、今回の作品の中に父親に対する思いも多く感じられました。家族のために頑張ってくれていることへの感謝の気持ち、親の姿をしつかり見ているのだと感じました。

また、家庭の教育力、親のあり方、今の子どもたちは何かとマイナスの事を言われますが、それぞれ本質的な思いは、昔も今も何も変わっていないのではないのでしょうか。表現の仕方が少し変わっただけなのではないのでしょうか。

この「こころの言の葉」のコンクールが、親子の思いを伝えるかけ橋になつてくれればと思います。ことばの力で、親子の絆をもつともつと深めてほしいと思います。

今回の作品集を読まれた方々にも、親の気持ち、子どもの気持ちを感じていただき、いろいろなどところで話題にしてもらえればありがたいと思います。

すばらしい作品集に出会えたことに感謝したいと思います。

市PTA連合会会長

## 編集後記

関係の皆様のご御尽力により、「こころの言の葉」コンクール作品集第十一集が完成しました。今年度も一万五千点を超える総応募数は、各中学校での取組の成果と感謝申し上げます。特に親の部の応募が昨年に引き続き千点を超えました。このことは、所期の目的である「中学生とその親の心の交流」にとつて、大きな意義があると思います。

今年の作品の傾向として、審査委員の皆様様の講評でも多く取り上げられていた言の葉の講評でも多く取り上げられていた言の葉「絆」といった、家族愛を中心としたものばかりではなく、子どもたちにとって辛い悲しい別れや、心の傷をありのままに綴った作品が多く見られました。また、そういった傷ついた心を包み込む親の姿を描いた作品も多くありました。作品集のタイトル「ゆれる心つつむ心」は、まさに、今年の作品の傾向を象徴しているものであります。

本年度の団体特別賞は、鹿兒島大学教育学部附属中学校が受賞しました。保護者の応募数と入賞作品の多さが評価されました。特に保護者の応募数は全生徒の六割を超えており、まさに、親子の心の交流を図る取組として、本事業が活用されたと言えるでしょう。

一方、十一年目を経た課題としては、中学校全校における保護者作品の応募への掘り起こしと本作品集のさらなる活用があります。

来年度もこれまでの成果と課題を踏まえ、ますます親子の心の交流が図られるよう取り組んでいきたいと思っております。事業の趣旨を理解していただき、さらに多くの応募をお待ちしております。

# こころの言の葉

～第11集 ゆれる心つつむ心～

平成25年12月20日

発行 鹿児島市教育委員会  
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1  
TEL (099)227-1941 FAX (099)227-1923

